

生活空間への作為の慣習の移住先における持続性に関する研究 —漁業権補償地である浦安市海楽地区の住宅外部空間に着目して—

A Study on the Continuity of Customs Concerning Living Space in Emigration

- Focusing on Housing Exterior Space in Kairaku, Urayasu city as Compensation Area for Fishery Right -

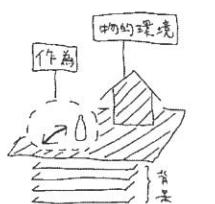
37-186165 前山倫子

The uniqueness of cities has been closely linked to the physical environment and the historical background of the land. The research question is that "customs such as how to interact with space, will continue even if they are separated from the physical environment by migration, etc." A field survey at Kairaku, a fishery rights compensation area, showed that the customs of the former fisherman town, i.e., the "expression of life" and "techniques for crafting," were maintained though it is not exactly the same, while changing its form.

1 序

1-1 研究の背景と目的

都市空間は自然地形や気候、当時の社会情勢や計画など様々な要素の蓄積により、それぞれが固有の空間として存在し、その物的環境と応答しながら、人々はその空間への「作為（＝図1 物的環境と作為の関係関わり方、使い方）」の慣習を獲得していく。日本では明治時代初期に歴史的建造物保存の意識が起つて以来、物的環境保存への関心は高まり続け、建築物単体から地域のアイデンティティを担保する町並みの保全へとその範囲は拡大されてきた。一方で人口減少下での保全の担い手不足などの課題も生じている。そこで本研究では物的環境ではなくそこで形成された慣習に注目する。



本研究の仮説を「都市の固有性をつくる物的環境やその土地の歴史的背景と密接に関係し成立してきた、空間との関わり方のようなそこに住む人々の慣習は、移住などによって物的環境と切り離されても、持続していくのではないか」と設定する。（図2）

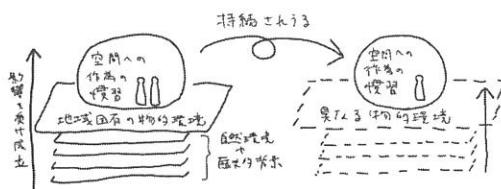


図2 仮説

「持続」とは「そのまま残る」こと以外にも「変化しながらも元のかたちとルーツとしてつながりをもつ」ことも含む、「継承」よりも広い意味を持つ言葉として用いる。

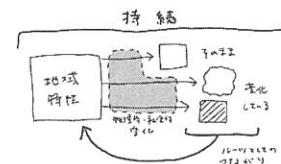


図3 「持続」の示す意味

1-2 対象地の決定

対象地の決定のために 1900 年代以降の日本における集団移転の性質を整理する。（表 1）

表 1 1900 年代以降の主な集団移転の整理

	期間	発生の機会	変遷の特徴	原因/目的	結果	移住先の特徴	最終の存続
①災害	防災集団移転事業	自然災害や生息地絶滅して生存	集団が保たれる	地域の判断	同自治体	有	残一部有
	津波被災	2011年 東日本大震災	避難先に分散	強制	自治体を越える場合もある	無	一部有
②過疎化集落再編成	1972~2000年ごろまで	集団が保たれる	地域の判断	同自治体	環境は異なる	有	残
③公共事業	ダム建設	既時 高度経済成長期	集団が保たれる	強制	同自治体	有	無
	埋立開発場所	高度経済成長期	移住元と分かれながら集団が保たれる	地盤を受けた住民の判断	沿岸埋立地	無	有
④戦時	捕獲	戦時	集団が保たれる	強制	占領地	無	無
参考	1900年前後	移住元で分かれる形で集団が保たれる	自然	北海道など遠方	事例により有		

「環境が変化した」という前提は全てが当てはまる。中でも移住先で移住前の環境を引き継ぐような計画が実施されていないものがより環境の変化が純粋に観測できる。また、時間経過による変化を観測できることから、移住前の集落が存続していることが望ましい。また世代交代を経て時間が経過した事例より、ある程度現在に近いものが持続を観測できる可能性が高い。

以上により、条件を満たし、かつ集団が保たれた調査のしやすい漁業権補償地を対象に設定する。大規模な漁業権補償地であり、地域の空間特性に着目した既往研究が多数存在するという点において、浦安市海楽を対象とする。

1 - 3 研究の手法と構成

本研究は図4のように構成される。2章で対象地の基本情報を整理し、3章で主に文献調査から具体的な検証の視点を設定、それを基に4章では実地調査の結果および考察を述べる。

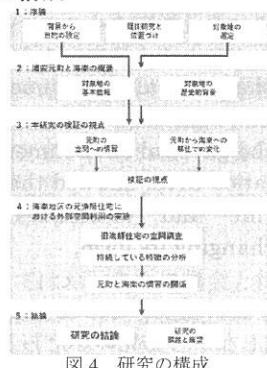


図4 研究の構成

1 - 4 用語の定義

- ・漁業権補償地：沿岸埋立開発により漁場が縮小・消滅するために漁民が組合単位で受けた補償のうち、埋立地の地権として与えられた土地、あるいはその土地があてがわされた地域一帯。
- ・旧漁師住宅：漁業権補償地において補償を受けた本人またはその親族が居住している住宅。漁業権補償地ではあるが、その後売買などにより、漁業権放棄前に漁業関係に従事していた住民以外が居住することとなった住宅は除く。

2 浦安元町と海楽の概要

2 - 1 対象地の位置

本研究の対象地である「元町」と「海楽」の位置を図5に示す。元町は自然地形上に成立した漁師町であり、海楽は漁業権放棄後の第1期埋立事業によって造成された通称「中町」に位置する。

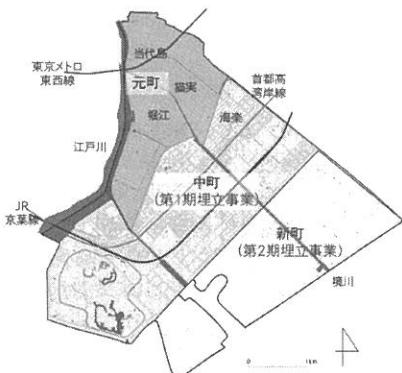


図5 浦安市における対象地の位置

本研究では海楽

1丁目を「海楽地区」と設定し、同時期に開発された漁業権補償地ではなく一般住宅地である「海楽パークシティ」とともに実地調査の対象とする。

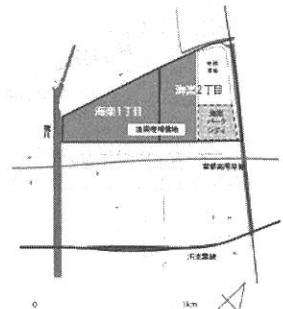


図6 「海楽地区」および「海楽パークシティ」の位置

2 - 2 浦安元町と海楽の歴史的関係

浦安元町は「堀江」「猫実」「当代島」の3つの漁村集落を中心に、主に漁業を生業として発展してきた。1960年代ごろまでは漁業、特に貝や海苔の養殖業を中心とした生活が営まれており、漁師は東京湾へ流れる小河川「境川」に船を繫留し、その両岸に住居を構えた。



図7 漁師町時代の元町の様子（浦安町誌（1969）より）

1951年に策定された「千葉県総合開発計画」のもと千葉県側の東京内湾で干拓および工業地帯造成が進行するが、浦安は地盤が軟弱であることや専業漁業者が多いことなどから対象外となっていた。しかし、工場排水や生活排水による環境汚染の影響を受け漁獲量は徐々に減少し、1958年の本州製紙江戸川工場悪水放流事件（通称「黒い水事件」）によって漁場が大きな被害を受けたことが決定打となり、漁業者は1962年に漁業権の一部放棄を決定、埋立によるさらなる環境の悪化から1971年に漁業権全面放棄を決定する。漁業従事者には組合を通して補償金と埋立後の海楽の地権を補償として分配された。漁業専業度が高いほど補償の等級は高く、最も高い等級では現金約570万円（当時）、地権120坪程度分が配分された。

漁業という生業を消失して以降、鉄道の開通など交通の便が改善されたことから浦安は都心に近いベッドタウンとしての様相を示し、漁師



図8 元町と中町の概歴

町時代の都市空間は大きく変化している。

3 検証の視点の設定【既往研究および文献調査】

3-1 元町における空間への作為の慣習

漁師町時代の元町において、家屋は境川沿いに集中し、船着き場と住居と大通りを結ぶように境川と垂直方向に通路空間が形成されていった。岡田ら（1987）は住戸間の道と庭が未分化のまま複合されたこの空間を「道庭」と呼び、その機能として①採光・通風・換気などの居住環境維持のためのスペース、②移動のための空間、③住戸規模が小さいことと境川や共同の井戸を水場として利用していたことを要因とした生活の場、④生業のための作業場、⑤子供の遊び場や主婦の世間話など交流の場、の5つを挙げている。道庭は各戸の敷地の一部が共出されて形成されており、物理的な敷地境界がなく道庭と住宅が開放的な関係を保ち、土地を私有する意識が薄かったことが窺える。安藤（2018）は文献およびヒアリング調査から、漁業集落時の住宅周りにおいて、具体的に「近隣の庭先を通る」「洗濯物を干す」「漁具・私物を置く」「家事をする」「台を出して座る」といった利用が行われていたことを示している。

以上より、元町の空間への作為の慣習を整理する。境川沿いに密集したことにより、通路あるいは作業の空間を確保するためにそれぞれが敷地を共用のものとして供出する必要があり、さらに住宅内に十分なスペースが無いことから家事や作業空間は共用空間に進出していた。生業および住環境担保という合理的な理由の元に

共有は成立したと言える。共有によって住民間の生活での接点は多く、社会関係が強化され、それにより空間の特徴も保たれるという構造が読み取れる。

ここでは、空間への作為の特徴を（i）敷地の供出、（ii）生活の表出と整理し、検証の視点とする。

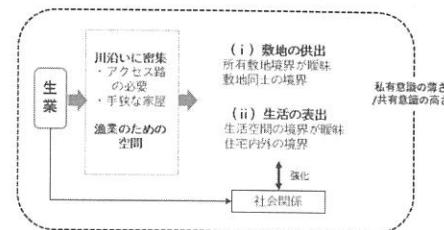


図9 元町における空間への作為の慣習の構造

3-2 元町から海楽への移住による環境変化

漁業権補償地への移住によって、住民は境川との関係や住環境といった物的環境の変化、漁業からの転向による生活や近隣関係の変化などの社会的環境の変化を経験することとなる。その変化を表2にて整理する。

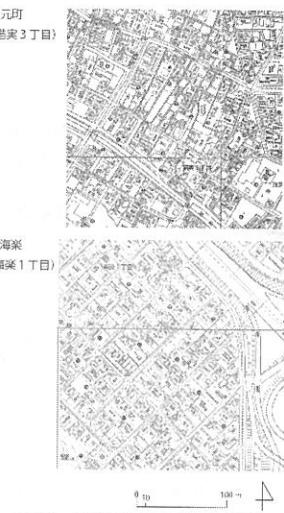


図10 同縮尺での元町と海楽
(ゼンリン住宅地図 2019 より)

表2 元町から海楽への移住による環境の変化

	漁師町時代の元町	(現在の元町)	海楽の漁業権補償地
街区形状	はらつきがある がま塗	一部面積整理などにより整地	整形
街路	自然発生により整形成 街区内部の路地	外周に4m以上の 道路整備 路地の減少	グリッド上に4m以上の道路 が並ぶ
建物用途	商業が混在	集合住宅の増加	戸建て住宅と集合住宅が 混在
住宅	坪小さな木造平屋住宅 インアーチ式整備	一般的な2階程度の 木造住宅が多数	一般的な2階程度の木造住宅 が多め、十数戸主没空間
居住層	漁業関係者	新旧住民が混在	元町漁業関係者が一定数、 現在は地主層 新規需要も混在
近隣との関係	庄築でのつながり 庄築の共井により直接	—	近隣が供出程度 漁師町時代の 近隣関係は弱体

4 海楽地区の元漁師住宅における外部空間利用の実態【実地調査結果】

4-1 調査方法

調査は主に筆者による現地調査による。2019年11月～2020年1月の間に対象地を数回訪問し、標準的な使い方と判断できるものを図面および写真により記録する。現地調査を補完する形でGoogleMap、航空写真やGoogleストリートビューを使用している。

4-2 調査対象住宅の選定

「海楽地区」には売買等により地権を手に入れた居住者も存在するため、ゼンリン住宅地図や登記情報を利用し、以下の方法で「旧漁師住宅」を選定する。(図11) 今回は対象住宅を39軒選定した。

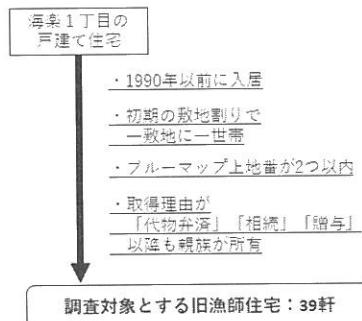


図11 調査対象とする旧漁師住宅選定の手順

4-3 敷地の供出に関する実態調査

海楽で敷地境界を超えた空間の共有が起こっているかを検証するために、「①敷地境界のしつらえ」、「②街路へのあふれ出しの有無」の調査を行う。

①敷地境界のしつらえの調査項目

旧漁師住宅の、街路に面する部分、隣接する住宅敷地に面する部分、裏の住宅敷地に面する部分について、その面において最も長い囲障の種類および高さ、透過性を記録する。

囲障の高さは目線の高さを考慮し、「高：150cm以上、中：150cm未満」とする。囲障の透過性は有、無で表現する。例えば、隙間の開いた柵や密度の低い生垣は透過性が有、ブロック塀や密度の高い生垣は透過性が無である。

②街路へのあふれ出しの調査項目

自分の敷地の外へはみ出して物を置くなど、街路を私的に利用しているものを記録する。ごみ収集や掲示など集団で利用されているものは除外する。

「①敷地境界のしつらえ」の結果を表3に示す。ほとんどの住宅で敷地境界は明確に仕切られており、境界を越えた共有は確認できなかった。囲障が無い4軒は全て車の進入のためである。あふれ出しについては、5軒の住宅において街路空間へはみ出しての利用が確認できた。

表3 敷地境界のしつらえの集計結果

海楽地区旧漁師住宅における敷地境界のしつらえの結果集計

分類別	街路との境界		隣家との境界		裏家との境界	
	有	無	有	無	有	無
全体 (39)	14	25	14	25	7	32
	6	33	9	30	11	28
	6	33	5	34	2	37
	9	30	10	29	18	21



図12 確認できたあふれ出しの様子

以上より、明確に区分された補償地を与えられたことで敷地境界への意識が明確になり、また十分な土地を得たことから敷地外に空間利用は減少している。「敷地の供出」の慣習は持続しているとは言えない。

4-4 生活の表出に関する実態調査

外部空間が生活の中で利用されているか、またそれが他者から見えているかを検証するために、「③外部空間の利用とその街路からの見え方の調査」を行う。

敷地の中でもっと大きい面積が最も大きい外部空間を「主外部空間」と定め(図13)調査・分析を行う。

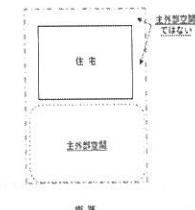


図13 主外部空間の設定

(a) 街路からの主外部空間全体の見え方

以下のように記録する。

◎：主外部空間が一覧できる

○：遮蔽物などはあるが、主外部空間が一部見える

△：遮蔽物などにより主外部空間がほとんど見えない、ごく一部しか見えない



図14 物干での見え方の例

(b) 外部空間の用途と見え方

既往研究を参考に、以下の用途分類を設定する。

アプローチ：玄関への通路空間

駐車・駐輪：車、自転車などの駐車駐輪スペース

物干し：家事利用としての洗濯物干し場

道具・資材置き：まとまりをもって道具や資材が置かれている場、傘立てなど一般に家屋周辺に置かれるものやごく少數のものは除外。

憩い：縁台や椅子などがあり滞在できる空間

園芸：植木鉢や菜園など小規模な植栽の空間

装飾用植栽：剪定を必要とする樹木などにより観賞用に作られた植栽空間

上記項目について、以下のように分類し記録する。

◎：利用がよく見える

○：遮蔽物などはあるが、利用が一部見える

△：遮蔽物などによりほとんど見えないが、

利用は行われている

×：利用がされていない

-：確認できない、不明

また、③外部空間の利用とその街路からの見え方については、その実態を比較するために海楽と同時期に入居が始まり、似た街区構造の海楽パークシティおよび浦安元町の境川周辺の住宅についても調査を行う。

「(a) 街路からの主外部空間全体の見え方」の3地区の結果を表4に示す。

表4 3地区の主外部空間の見え方の集計結果

	◎：よく見える	○：一部見える	△：ほぼ見えない	計
海楽全体	11	23	5	39
パークシティ	0	2	8	10
元町	1	7	2	10

パークシティが全体で生垣が整備されており見えにくい中、海楽地区および元町では「よく見える」または「一部見える」住宅がほとんど

であった。



図15 主外部空間が「よく見える」海楽の住宅（左）と「ほぼ見えない」パークシティの住宅（右）

「(b) 外部空間の用途と見え方」の結果を表5に示す。

「アプローチ」「駐輪・駐車」「園芸」については3地区すべてで利用が確認できるため、一般的な外部空間利用であるとみなせる。

漁師町時代に元町で行われていた「物干し」は、海楽ではほとんどの住宅で確認できるが、元町では約7割となった。「道具・資材置き」については、元町ではほとんど、海楽では一部で確認でき、パークシティでは全く確認できないことから、漁師町時代に由来する慣習である可能性が高い。

以上より、海楽の旧漁師住宅はパークシティのような一般住宅より生活空間を開く傾向が読み取れた。また、「物干し」や「道具・資材置き」のように、新たに手に入れた十分な広さの外部空間において再現されており、「生活の表出」は形を変えつつ持続している。

4-5 特徴的な要素についての調査と考察

特に漁師町時代の慣習との関係が強いと推測できる「道具・資材置き」について、その実態と関連する「小屋空間」についての調査を行う。

表5 外部空間の用途と見え方の集計結果

分類別	アプローチ %		駐車・駐輪 %		物干し %		道具・資材置き %		憩い %		園芸 %		装飾的植栽 %		
	◎	○	◎	○	◎	○	◎	○	◎	○	◎	○	◎	○	
海楽 初期 (戸数:19)	◎ 12	63.2	◎ 10	52.6	◎ 8	42.1	◎ 5	26.3	◎ 2	10.5	◎ 3	15.8	◎ 3	15.8	
	○ 3	15.8	○ 1	5.3	○ 4	21.1	○ 2	10.5	○ 3	15.8	○ 10	52.6	○ 3	15.8	
	△ 2	10.5	△ 0	0.0	△ 5	26.3	△ 0	0.0	△ 0	0	△ 3	15.8	△ 2	10.5	
	×	2	10.5	×	8	42.1	×	8	42.1	×	10	52.6	×	2	10.5
	- 0	0.0	- 0	0.0	- 1	5.3	- 4	21.1	- 4	21.1	- 1	5.3	- 0	0	
パークシティ 初期 (10)	◎ 2	20.0	◎ 5	50.0	◎ 0	0.0	◎ 0	0.0	◎ 0	0.0	◎ 1	10.0	◎ 0	0.0	
	○ 4	40.0	○ 0	0.0	○ 1	10.0	○ 0	0.0	○ 1	10.0	○ 2	20.0	○ 0	0.0	
	△ 0	0.0	△ 0	0.0	△ 2	20.0	△ 0	0.0	△ 3	30.0	△ 4	40.0	△ 2	20.0	
	×	4	40.0	×	5	50.0	×	4	40.0	×	6	60.0	×	2	20.0
	- 0	0.0	- 0	0.0	- 3	30.0	- 4	40.0	- 4	40.0	- 3	30.0	- 3	30.0	
元町 初期 主外部空間 +路地 (9)	◎ 8	88.9	◎ 5	55.6	◎ 2	22.2	◎ 3	33.3	◎ 0	0.0	◎ 7	77.8	◎ 0	0.0	
	○ 1	11.1	○ 1	11.1	○ 2	22.2	○ 4	44.4	○ 0	0.0	○ 0	0.0	○ 2	22.2	
	△ 0	0.0	△ 0	0.0	△ 2	22.2	△ 1	11.1	△ 0	0.0	△ 2	22.2	△ 1	11.1	
	×	0	0.0	×	3	33.3	×	3	33.3	×	1	11.1	×	0	0.0
	- 0	0.0	- 0	0.0	- 0	0.0	- 1	11.1	- 1	11.1	- 0	0.0	- 0	0.0	

「道具・資材置き」が確認できた住宅において、置かれているものは海楽と元町で共通し、棒や網などの資材、容器類、脚立や工具などの道具、園芸用品や清掃用品が多数であった。海楽および元町では外部空間において藤棚や物干し場などが自作されている様子を確認できることから、これらはそのための資材や道具であると推測できる。

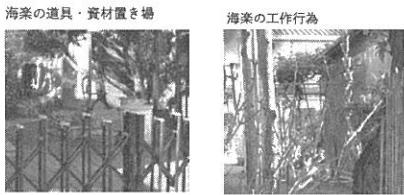
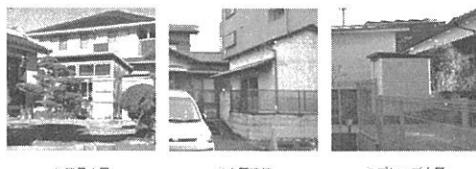


図 16 資材・道具置き場と工作行為

海楽の旧漁師住宅における小屋空間の有無の調査結果を表 6 に示す。

表 6 海楽における小屋空間の有無の集計結果

	簡易小屋	小屋建築	フレハブ小屋
初期(19)	8	9	7
初期 2 軒(2)	1	0	2
初期 + 新規(6)	3	0	1
新規(0)	1	2	6
新規 2 軒(3)	0	1	3
全体(39)	13	12	19



1 簡易小屋

2 小屋建築

3 フレハブ小屋

半数以上の住宅に小屋空間が存在し、3 分の 1 が自作の簡易小屋を所持している。簡易小屋には元は漁師が作った漁具小屋であったものもあり、それを漁具以外の道具や資材置き場として転用している例がある。¹

以上より、「道具を置く」という外部空間の使い方および簡易小屋空間は、単に漁師町時代の名残として引き継がれているのではなく、「自らが何かをつくるという技術」を担保に引き継がれたのではないかと考えられる。

5 結

5 - 1 漁師町時代の慣習と海楽の空間との対応

元町から海楽への移住では、そのままの形での物的環境や慣習の継承は起きていないが、「生活の表出」および「ものをつくる技術」に関係した空間への作為の慣習が引き継がれており、移住により環境が変化した後も空間への作為の

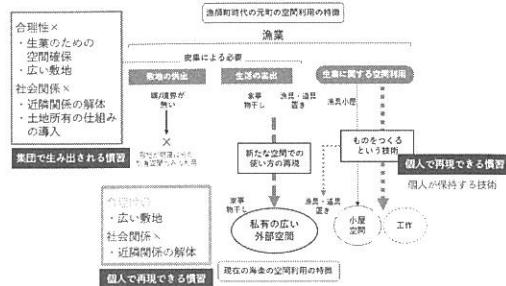


図 17 漁師町時代の元町の慣習と海楽の空間との対応

慣習は持続する関係を見出すことができる。

漁師町時代の元町の空間への慣習のうち、「敷地の供出」が持続しなかった要因は、個人の敷地が狭小であるために空間を持ち寄る必要があるという合理性が失われたこと、生業を背景にもつ近隣関係が解体されたことが考えられる。「生活空間の表出」は、反対に「広い敷地を得た」ことによりその空間を使うことに合理性が生じている。また、「敷地の供出」は隣家や街路といった他者との関係が大きく寄与するのに対し、「生活の表出」および「生業に由来する技術」は個人で再現・保持できる慣習であることも関係していると考えられる。

5 - 2 本研究の課題と展開

移住前の空間の作為の慣習が移住先に適応しながら引き継がれていることを示したが、世代を超えて定着については検証していない。また、本研究ではかつての元町と現在の海楽という 2 地点の空間調査のみに留まっているが、社会調査や連続した変遷の調査を行うことで持続の背景には何が要因としてあるかを明らかにすることが期待できる。本研究は一事例の検証に過ぎないが、事例を拡大することで移住一般の議論への展開が望まれる。

[注釈]

1. 旧漁師住宅住民 2 名へのヒアリングより。
- 【主要参考文献】
 1. 浦安市(1999)「浦安市史[まちづくり編]」
 2. 浦安市(1985)「浦安市史」
 3. 浦安町役場(1969)「浦安町誌」
 4. 浦安・聞き書き隊(2009)『ハマン記憶を明日へ』聞き書き報告書 1』
 5. 岡田威海(1987)『道と庭』[住環境の屋外空間]』
 6. 浦安調査研究グループ(1971)、東京湾埋立に伴う地域の変貌—浦安町のケースタディー、地域開発 82 号
 7. 若林敬子(1974)埋立地域にみる環境破壊と漁民闘争史、環境法研究
 8. 加藤秀雄(2011)、東京湾沿岸部の大規模開発に伴う生活変化高度経済成長期の浦安を事例に、国立歴史民族博物館研究報告(385)
 9. 岡田威海(1987)、環境の構造に関する基礎的研究—日本民家集落の場合の考察—、東京大学博士論文
 10. 犬田亜矢(2006)、「漁村から住宅地に変容しつつある浦安において継承すべき文化: 突発性リスクと進行性リスクに配慮した空間マネジメント」
 11. 安藤理紗ら(2018)、「現大好況空間の私的利用にみる生活空間の共用に関する地域特性の継承—浦安地区を対象として—」
 12. 永門航(2018)、「大都市近郊旧漁師町の空間形成に関する研究千葉県浦安市浦安元町地域を中心とする高度成長期以降の空間的な変容と継承に着目して」

都市部における若年層単身生活者の地域愛着形成に関する研究
Research on place attachment of the single-young in urban area

37-186171 箭川展

Single-young people living in urban area are often regarded as unconcerned with the local community. The purpose of this study is to clarify the feature of their place attachment and explore how urban design for them ought to be. Throughout a web-questionnaire survey conducted in the Tokyo metropolitan area, we found that the way they form place attachment differs from the way those who live with children does. Various spaces contribute to the formation of thier place attachment. We also conducted interview survey, which clarified the need for "a space where they can stay alone" instead of "a space only for them."

1 序論

(1) 背景と目的

本研究の対象は20代から30代の都市部で一人暮らしを営む者である。こうした人々は、日々、自宅と勤務先を電車で往復するというライフスタイルに加え、近所トラブルや地域活動への不参加から、しばしば「地域と関係がない存在」と見做される傾向にある。

こうした若年層の単身生活者は特に東京をはじめとした都市部においては多く存在している。国勢調査によれば東京都における各年代の一般世帯数に占める単身世帯の割合は、20代は40.3%、30代は28.4%である。だが、都市計画やまちづくりにおいて、若年層の単身生活者に向けたものが多くみられるとは言い難い。

そこで本研究では、地域愛着という視点から、単身生活者と地域との関係性を明らかにし、単身生活者を視野に入れた都市デザインへの可能性について考察する。

(2) 本研究の位置づけ

単身生活者や単身世帯についての既往研究は単身高齢者に関する研究が多くを占めており、それを除くと居住地選択に関する研究がある。河合(2009)はヘドニック・モデルの構築によって専有面積30平米以下の単身者用住宅を求める人々が住環境よりも利便性を重視しているということを明らかにしている。鈴木ら(2012)は住宅機能の都市への流出が都市空間形成の一端を担っているという前提のもと、2人以上世帯と比較し、単身世帯はコンビニやファストフード店といった住宅の機能を代替する施設を利用しやすい領域に分布する傾向があることを明らかにしている。

鈴木ら(2008a)や鈴木ら(2008b)は「風土との関わり」が多いほど地域愛着が強いという仮説

のもと、行動パターンがどのように地域愛着に影響しているかについての分析を行っている。一連の結果として、商店街や小規模な店舗の利用、寺社の存在の認識といった風土との関わりが地域愛着に寄与するということを明らかにしている。鈴木ら(2009)は大規模小売店舗新規出店前後のパネル調査の結果を分析から地域の消費行動、支出の約20%が当該店舗に費やされるようになったが、地域愛着に直接の影響はないことが明らかになった。この結果に対し、地域愛着は長期的に醸成されるものであり、短期的な変化が見られなかった可能性を指摘している。鈴木ら(2008c)はまちづくり行動や行政の社会基盤整備に対する信頼等の地域への協力行動に関する諸変数に地域愛着が及ぼす影響について分析し、地域愛着が高い人ほど町内会活動やまちづくり活動などの地域への活動に熱心であることを明らかにしている。

これらの地域愛着に関する既往研究の回答者の多くは地方都市在住で、年齢層が高い。既往研究や民間の調査などによっても、単身世帯と複数人世帯での環境の選好が異なることは指摘されており、単身生活者の地域愛着形成は既往研究と異なる傾向を示すことが考えられる。この視点が本研究の新規性である。

(3) 地域愛着の枠組み

日本国内における地域愛着に関する研究は、Place Attachmentという概念を引用するものが多い。Scannell(2010)は、既往研究における様々な定義を総合し、Place Attachmentの理論的枠組みとしてPerson, Place, Processの3者によるモデルを提示している。さらに、Personは文化・集団と個人に、Placeは社会的と物理的に、Processは影響と認知と行動に分けられると整理している。Lewicka(2011)は、既往研究を

レビューし、論点、手法、理論を整理した上で、Place Attachmentについての研究は特定の理論に基づかずに行われることが多い点を批判している。Lewicka(2010)は、既存のPlace Attachment研究における規定因(predictor)について、大きくSocio-demographic predictors, Social predictors, Physical predictorsの3つに整理している。また、Raymond(2010)は、それまで様々に定義されていたPlace Attachmentの測定手法の確立のため、既往研究から5つの次元として、Place Identity, Place Dependence, Nature Bonding, Family Bonding, Friend Bondingを整理し、この5次元を用いてPlace Attachmentを測定する妥当性を検証している。

本研究においては上記の既往研究を参考に、地域空間における「経験」、個人属性として愛着に影響する「規定因」、地域空間の「類型」という概念、また地域空間愛着と居住エリア愛着という二つの地域愛着を定義し、地域空間における経験が地域空間愛着に影響し、地域空間愛着が居住エリア愛着に影響する。この影響の仕方とそれぞれの愛着は規定因によって影響を受ける、という愛着の形成モデルを設定する。

この枠組みにおいて、居住エリア愛着及び地域空間愛着の実態、地域空間愛着と居住エリア愛着の関係性、経験と地域空間愛着の関係性という三つの論点について、それぞれ分析を行う。

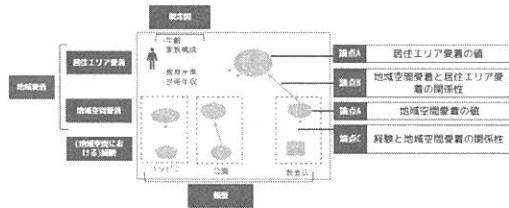


図1 地域愛着の形成モデルと本研究の論点

2 単身生活者の地域愛着形成の傾向

(1)アンケート調査概要

アンケート調査の概要は表1に示す。

表1 アンケート調査概要

方法：マクロミル社によるインターネットアンケート
サンプル数：718
回答者属性：1都6県在住の20~59歳
実施日：2019年8月

地域空間については、回答者一人に対し、3か所の愛着のある地域の場所を自由回答で尋ねた。既往研究を参考に、これらの分類を行った。

地域愛着については、Raymond(2010)の検証した5つのPlace Attachmentの次元のうち

Family Bondingを除いた4要素(Place Identity, Place Dependence, Nature Bonding, Friend Bonding)を利用し、7件法で設問を設定した。確証的因子分析によりこの指標を用いる妥当性を検証し、各要素に属する設問の平均値を愛着の各要素の得点として利用する。要素得点を以下それぞれPI, PD, NB, FBと呼称する。

経験については、既往研究で愛着への寄与が認められている要因のうち、空間性を伴って経験されるものを8つ、7件法の設問で設定した。探索的因子分析により3因子(審美的経験、実用的経験、交流的経験)を抽出し、各因子に属する設問の平均値をその因子の得点として利用する。

表2 地域空間の分類

大分類	類型	回答数	備考
商業施設	大型店舗	102	
	スーパー	226	
	コンビニ	38	
	商店街	32	
飲食店	飲食店	65	
	学校	85	学校+校庭・プール
	公園	260	公園+広場
	寺社	41	
教育文化施設	自然	126	田・緑道・桜並木・遊歩道・川・海・古墳
	駅	63	
	街路	71	緑道や遊歩道は除く
	その他	178	
交通施設	無効回答	867	他回答との重複・設問に答えていない・抽象的・特になし
	総計	2154	

また、回答者の居住環境をコントロールするために、DID居住人口が全人口の90%以上である市区町村を「都市部市区町村」と定義し、これを用いて2つのサンプルグループを定義した(表2)。以下の分析はこのサンプルの比較を中心に行う。

表3 サンプルの分類

名称	年代	就業	世帯構成	居住地	サンプル数
都市部 単身サンプル	20~39		単身世帯		225
		している		都市部市区町村	
都市部 ファミリーサンプル	20~59		子と同居		61

(2)地域愛着の値

地域愛着の各要素の値が、サンプルグループによって異なるかを検証するため、t検定を行った。全サンプルでの平均値を比較すると、PI、NB、FBに有意な差があるが、規定因をコントロールした比較では有意差の見られない組み合わせが1つ以上現れた。単身生活者の愛着はファミリー生活者と比較して低いが、これにはファミリー生活者においては居住年数や家や土地の所有といった規定因の差が影響していることが明らかになった。

ただし、一般に単身生活者は賃貸住宅に住むことが多く居住年数も短く、逆にファミリー層は持ち家に住むことが多いことを考慮すると、

都市部単身生活者は都市部ファミリー生活者と比較して、地域愛着がないと言えよう。こうした今後単身生活者の個人属性の傾向が大きく変化するとは考えにくく、現状を維持したままでは単身生活者とファミリー生活者の愛着の差は埋まらないと考えられる。

表4 居住エリア愛着の要素比較

コントロールなし	都市部ファミリーサンプル	都市部単身サンプル	t値	p値
PI	4.041	3.573	2.583	0.010 *
PD	3.713	3.451	1.580	0.115
NB	3.701	3.120	3.216	0.001 **
FB	3.820	3.033	3.859	0.000 **
サンプル数	61	225		

家・土地の所有コントロール	都市部ファミリーサンプル	都市部単身サンプル	t値	p値
PI	3.672	3.593	0.318	0.750
PD	3.319	3.450	-0.581	0.562
NB	3.284	3.123	0.650	0.516
FB	3.241	3.005	0.847	0.398
サンプル数	29	210		

*<.05, **<.01

(3)地域空間類型の出現頻度

愛着の実態の一つの側面として、どういった地域空間類型に愛着を持ちやすいかが挙げられる。この比較のため、愛着があると回答した類型の出現回数について、サンプルグループの母比率の差の検定を行った。

対象単身サンプルは有意に飲食店に愛着を持つ傾向がある一方で、ファミリー世帯については学校、寺社、公園、自然の4類型について有意に答える頻度が高かった。その他の類型については有意な差が見られなかった。

飲食店については、民間の調査においても単身生活者は食事を外食で済ませる傾向が見られることからも、単身生活者の生活行動の特徴が地域空間愛着の形成にも影響を与えた結果と言える。

表5 地域空間類型の出現頻度に関するt検定

	都市部単身サンプル	都市部ファミリーサンプル	t値	p値
大型店舗	25	6	1.000	0.318
コンビニ	17	2	1.162	0.246
スーパー	85	16	1.482	0.139
飲食店	36	2	2.479	0.013 *
駅	26	4	1.088	0.277
街路	20	3	0.983	0.326
学校	9	9	-3.014	0.003 **
公園	58	26	-2.271	0.023 *
寺社	4	7	-3.468	0.001 **
自然	15	15	-3.933	0.000 **
商店街	22	3	1.155	0.248
その他	58	13		*<.05, **<.01
総計	375	106		

(4)居住エリア愛着と地域空間愛着の相関

単身生活者とファミリー生活者のそれぞれに対し、類型ごとに地域空間の愛着と居住エリアの愛着の相関分析を行った。なお、サンプル数が5以下の類型については分析対象外とした。本研究においては地域空間から居住エリア愛着が形成されるというプロセスを仮定している。したがって、本節における相関分析の結果において、相関が高いことは、その地域空間における愛着が高まることが、居住エリアの愛着が高まることにより寄与しやすいと解釈できる。

対象単身サンプルと対象ファミリーサンプルで大きく傾向が異なるのは、大型店舗やスーパーといった類型である。ファミリー層は大型の店舗の愛着が高まったとしても、居住エリアへの愛着が高まるとは言えない一方で、単身生活者については、大型の店舗への愛着も居住エリアへの愛着に寄与すると考えられる。

一方で、単身生活者の公園や自然空間への愛着は居住エリアへの愛着に寄与するという結果が得られた。前項では単身生活者は公園や自然空間への愛着に持ちにくい傾向が明らかになつたことと合わせ、単身生活者の公園や自然への愛着を高める重要な性が示唆された。

表6 都市部単身サンプルにおける相関分析

	居住エリア愛着				サンプル数
	PI	PD	NB	FB	
全類型	0.628 **	0.577 **	0.456 **	0.458 **	375
	0.580 **	0.651 **	0.511 **	0.477 **	
	0.492 **	0.506 **	0.623 **	0.623 **	
	0.436 **	0.501 **	0.518 **	0.647 **	
PI	0.359	0.563 **	0.666 **	0.719 **	
大型店舗	0.545 **	0.538 **	0.591 **	0.568 **	25
NB	0.454 *	0.551 **	0.720 **	0.657 **	
FB	0.616 **	0.712 **	0.652 **	0.603 **	
PI	0.591 **	0.637 **	0.529 **	0.456 **	
スーパー	0.503 **	0.668 **	0.588 **	0.456 **	85
NB	0.423 **	0.500 **	0.629 **	0.663 **	
FB	0.341 **	0.501 **	0.537 **	0.637 **	
PI	0.757 **	0.629 **	0.598 **	0.617 **	
飲食店	0.681 **	0.714 **	0.578 **	0.605 **	36
NB	0.593 **	0.654 **	0.799 **	0.732 **	
FB	0.603 **	0.616 **	0.648 **	0.719 **	
PI	0.592 *	0.495 *	0.602 *	0.375	
コンビニ	0.713 **	0.739 **	0.760 **	0.606 *	17
NB	0.562 *	0.621 **	0.761 **	0.792 **	
FB	0.494 *	0.576 *	0.703 **	0.741 **	
PI	0.706 **	0.707 **	0.438 **	0.518 **	
公園	0.736 **	0.747 **	0.456 **	0.428 **	58
NB	0.660 **	0.570 **	0.529 **	0.670 **	
FB	0.467 **	0.468 **	0.573 **	0.716 **	
PI	0.592 *	0.624 *	0.622 *	0.412	
自然	0.568 *	0.695 **	0.665 **	0.363	15
NB	0.350	0.532 *	0.769 **	0.424	
FB	0.361	0.356	0.409	0.678 **	
PI	0.721 **	0.568 **	0.409	0.362	
商店街	0.417	0.623 **	0.218	0.270	22
NB	0.428 *	0.367	0.282	0.175	
FB	0.169	0.453 *	0.290	0.514 *	
PI					
寺社	PD				4
NB					
FB					
PI	0.530	0.417	0.434	0.342	
学校	PD	0.804 **	0.697 *	0.825 **	9
NB	0.558	0.383	0.558	0.631	
FB	0.438	0.046	0.379	0.296	
PI	0.591 **	0.533 *	0.471 *	0.338	
街路	PD	0.552 *	0.565 **	0.496 *	0.389
NB	0.114	0.182	0.522 *	0.372	
FB	0.274	0.381	0.520 *	0.745 **	
PI	0.614 **	0.534 **	0.202	0.213	
駅	PD	0.226	0.577 **	0.300	26
NB	0.205	0.385	0.261	0.447 *	
FB	0.153	0.636 **	0.366	0.456 *	

(5) 地域空間における経験と愛着の関係性

サンプルグループごとに、愛着の要素を従属変数、3つの経験因子を説明変数とする重回帰分析をPI、PD、NB、FBのそれぞれについて行い、その結果をまとめて比較した。5%有意となったパスのうち、標準化係数が0.3以上のものを太い矢印、0.3未満のものを細い矢印で示した。

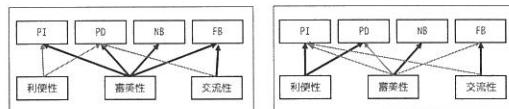


図2 都市部単身サンプルの経験と愛着の関係性

まず対象単身サンプルと対象ファミリーサンプルの傾向の差異について検討する。NBだけでなくPIやPDにも最も影響力が高い因子が審美的経験であることを考慮すると、単身サンプルにおける審美的経験の重要性が認められる。

また、交流的経験からのパスに着目すると、対象ファミリーサンプルではFBとPIに影響が認められる一方で、対象単身サンプルにおいてはFBに加えPDにも寄与しているという結果が得られた。単身者は地域における交流を望んでいないと言うものの実際に交流が起こった際にはその空間に愛着が湧く可能性が示唆されている。

また、地域空間の類型ごとに重視される経験も異なっている可能性が高いと考えられるため、都市部単身生活サンプルについて、類型ごとに前項と同様の各要素における重回帰分析を行った。前の分析同様、5%有意となったパスのうち、標準化係数が0.3以上のものを太い矢印、0.3未満のものを細い矢印で示した。また、点線は負の説明力を示す。

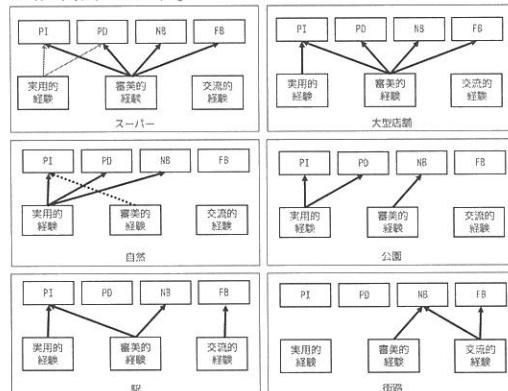


図3 地域空間類型ごと都市部単身サンプルの経験と愛着の関係性

この結果、空間のタイプによって重要視される経験が異なることが明らかになった。公園や自然といった空間では、実用的経験を若干重視している傾向がある一方で、交通施設においては交流的経験がFriend Bondingを形成する傾向が見られる。商業施設において単身生活者は審美的な経験により愛着を形成する傾向が明らかになった。

3 ケーススタディ

(1) インタビュー調査概要

本章では、特に具体的な場所における経験と愛着の関係性に関する質的調査を通して、単身生活者を視野に入れた都市デザインへの応用に対する知見を得る。特に、前章で愛着ある空間として挙げられにくい傾向にあった自然空間及び公園について愛着につながる経験と利用状況の実態を明らかにすることを目的とする。

調査対象地の条件として、一定程度の若年層単身居住者の存在、公園及び自然空間のバリエーション、都心に通勤するライフスタイルの3点が挙げられる。本研究では板橋区高島平地域を対象地とする。高島平を構成する自然的空間や公園のうち、本研究では高島平緑地、前谷津川緑道、新河岸川、徳丸が原公園、赤塚公園(中央地区)の5つを扱う。スノーボールサンプリングにより、板橋区高島平地域の単身生活者10名のインタビュー調査のサンプルを得て、利用頻度や目的、愛着のある理由について半構造化インタビューを行った。こちらからの質問による愛着のある場所の回答への影響を取り除くため、先に愛着のある場所をすべて伺い、その後に挙げられていない自然空間についての質問を行った。回答者の居住地と質問を行った自然空間と公園を図4に示す。なお、個人情報保護の観点から、各居住者は居住する街区で示した。

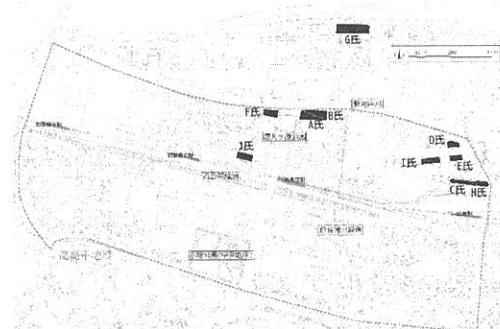


図4 回答者の居住地と対象となる自然空間

愛着がある挙げられた自然空間についての回答数は13であった。前章で定義した経験の枠組みを用いて理由のグルーピングを行った。

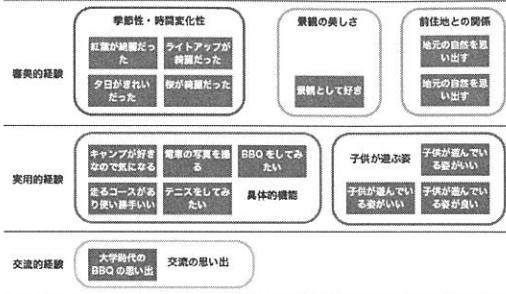


図5 愛着のある理由のグルーピング

単純に景観的に美しい、単純的に利便性が高いといった意見はほぼ見られず、具体的な機能や季節性に関わる意見が多く見られた。前住地との関係は単身生活者に特有のものと考えられる。子供の遊ぶ姿が見られるという回答も複数得られたが、子供がいるので自分のための空間ではないという回答も見られた。

(2)目的との関係性

当該空間の利用目的と居住地の関係性についての分析を行った。

複数の空間を散歩によって利用し、それらに愛着が形成される回答者が複数見られたのが第一に特徴的な点である。また、他の目的について利用する空間にも愛着が形成される可能性も示された。「緑道の先に何もないで利用しない」という回答が得られたことからも、付随的な利用の重要性が示唆される。

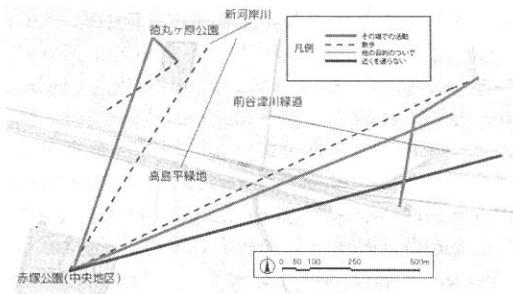


図6 回答者の愛着と利用目的の関係性

(3)利用頻度との関係

「利用」は内部での活動、あるいは散歩での意図的な通行を示し、「通行」は横切る、周囲を歩行のみ、などの行動とし、愛着の有無と利用

頻度との関係性に着目した。

通りがかるだけで愛着が形成されることはあまりなく、内部を利用することが愛着の形成に重要であると考えられる。一方で、愛着がある場所については距離があっても月一回以上利用する回答者も少なくなかった。

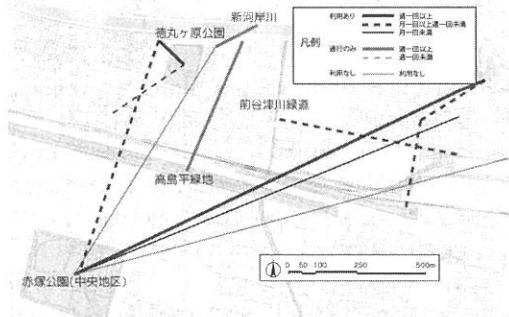


図7 回答者の愛着と利用頻度の関係性

4 結論

(1)都市部単身生活者の地域愛着形成

2章の結果から都市部単身生活者の地域愛着形成の傾向は都市部ファミリー生活者と異なることが明らかになった。

都市部ファミリー生活者においては、既往研究の結果と同様、商業施設などの愛着は居住エリア愛着に寄与せず、自然や公園といった空間の愛着が居住エリア愛着を形成するという結果になった。この結果と都市部単身生活者の比較により、都市部単身生活者の愛着形成における3点の特徴が明らかになった。

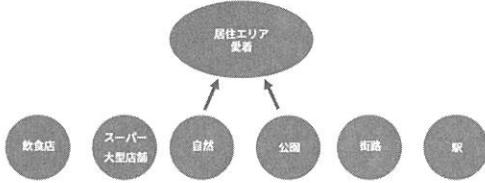


図8 都市部ファミリーサンプルにおける地域愛着形成の模式図

まず、都市部単身生活者は居住エリアへの愛着が低い。また、飲食店に愛着を持ちやすい傾向を持つ一方で、自然空間や公園に愛着を持つ人は少ない。また、自然空間や公園に加え、商業施設や街路などに愛着を持つことも、居住エリアへの愛着を高めることに寄与する。

また、空間類型によって、経験と地域空間愛着の関係性が異なることも明らかになった。

単身生活者の居住エリア愛着は様々な空間へ

の愛着の影響を受けることから、単身生活者の生活における都市空間を考える重要性が示唆された。

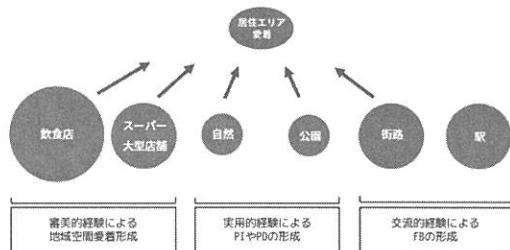


図9 都市部単身サンプルの地域愛着形成の相対的模式図

(2)都市デザインへの示唆

また、単身生活者を視野に入れた都市デザインの可能性についてはケーススタディから3点が示唆された。

一点目は単身生活者も滞在しやすいような空間作りである。南後(2018)では「ひとり」空間が単身世帯の生活を支えているという論が展開され、こうした空間は単身生活者の生活を支えているのは確かであるが、こと公園や緑地空間といった地域愛着への形成という観点からは、子供の利用するような空間に入りやすい、といった工夫が求められるとと言えよう。

二点目としては都市機能を分散させ、その間を緑地でネットワークするような都市構造である。このことは、散歩で複数の緑地を利用するような単身生活者が存在することが明らかになったこと、他の目的のついでの利用からも愛着が形成されることから示唆される。

三点目は公園や緑地空間における機能の分担と多様化である。愛着の理由として単純に景観的な要素からの回答は少なく、具体的な機能が多く挙げられた。居住者により求める機能は異なるため、単調に公園を分布させるだけではない面的な計画が求められる。

(3)今後の課題

本研究においては、都市部ファミリー生活者と都市部単身生活者の比較分析を行った。都市部における単身生活者に特有の傾向をより明確にするためには、夫婦二人世帯や郊外部の単身生活者といった異なるサンプルグループとの比較が求められる。

また、今回は単身生活者の地域愛着の形成に着目して分析を行った。既往研究では地域愛着あるいはPlace Attachmentは地域参画や行政への信頼などをもたらすことが明らかになって

いるが、これらの要素についても、単身生活者については異なる傾向を示す可能性がある。また、単身生活者の地域愛着既往研究では報告されていない要素をもたらす可能性も考えられる。こうした点については今後検討課題としたい。

参考資料

- 鈴木春奈,藤井聰(2007),「利用店舗への愛着が地域愛着へ及ぼす影響とその規定因に関する研究」,『日本都市計画学会都市計画論文集 vol.42・3』, pp13-18
 鈴木春菜,藤井聰(2008a),「「地域風土」への移動途上接触が「地域愛着」に及ぼす影響に関する研究」,『土木学会論文集 D Vol64 No.2』, pp179-189
 鈴木春菜,藤井聰(2008b),「「消費行動」が「地域愛着」に及ぼす影響に関する研究」,『土木学会論文集 D Vol64 No.2』, pp190-200
 鈴木春菜,藤井聰(2009),「地方都市における郊外型大型店出店が消費行動および地域愛着に与える影響について」,『土木計画学研究・論文集 Vol.26 No.2』, pp307-314
 河合伸治(2009),「ヘドニック・アプローチによる地域住民の選好の推定 -西武池袋線・東武東上線沿線の単身者用賃貸住宅を事例として-」,『社会研論集 Vol.14』, pp213-222
 鈴木達也,讃岐亮,吉川徹(2012),「住宅の機能を代替する施設の立地と単身者の生活行動の関連の分析」,『日本建築学会計画系論文集 第77卷 第675号』, pp1131-1137
 東京ガス株式会社都市生活研究所(2016)「集合住宅に住む未婚単身者の地域コミュニティの実態と意識」
 南後由和(2018)『ひとり空間の都市論』ちくま新書
 藤森克彦(2010)『単身急増社会の衝撃』日本経済新聞出版社
 藤森克彦(2017)『単身急増社会の希望』日本経済新聞出版社
 板橋区(2014)「高島平地域グランドデザイン」
 東京都建設局(2015)「赤塚公園マネジメントプラン」
 板橋区(2018)「高島平プロムナード基本構想」
 Maria Lewicka(2011), "Place attachment: How far have we come in the last 40 years?", Journal of Environmental Psychology 31
 Leila Scannell, Robert Gifford(2010), "Defining place attachment: A tripartite organizing framework", Journal of Environmental Psychology 30
 Maria Lewicka(2010), "What makes neighborhood different from home and city? Effects of place scale on place attachment", Journal of Environmental Psychology 30
 Christopher M. Raymond, Gregory Brown, Delene Weber(2010), "The measurement of place attachment: Personal, community, and environmental connections", Journal of Environmental Psychology 30
 Misun Hur, Jack L. Nasar, Bumseok Chun(2010), "Neighborhood satisfaction, physical and perceived naturalness and openness.", Journal of Environmental Psychology 30, pp52-59